

大病から奇跡の生還！

その顛末をその救世主となった鈴木貴樹本部長と
小杉傳一郎さんに聞く

—— 本年二月東京本部にて公認デモンストラーター 深堀寛二取材

今日は、会長スペシャルに参加された小杉傳一郎さんとその大病から小杉さんを救った鈴木貴樹本部長から、そのストーリーを伺い、皆さんにお知らせしたいと思います。お二方、どうぞよろしくお願いいたします。

小杉さん… よろしく願います。

本部長… よろしく願います。

それでは、小杉さん、まずその大変なご病気のことからその経緯を大まかに教えていただけますか。

小杉さん（以降敬称略）… 2021年の十月に新潟市のミニドックを受けたんですが、その一週間位前に物凄いの腰痛がきたんですよ。もう痛だと思っ
てね、ミニドックに行ったらもう凄く血圧が上がってヤバイと言われて、全身精密検査をやったんです。そうしたら専門の病院に行ってくださいと言われて済生会病院に行ったんです。そこで十二月十六日に検査を一日掛りを受けて、その時私の主治医になった執刀医が「あなたは手術をして治すのはいやですか？」と聞かれて、私は「嫌です」と全体の仕事上何ヶ月も休めないからと言ったんですが、「あなたね。人を治すなら自分を治さないよ」言われました。同時に「あなたの症状はいつ死んでもおかしくない」と言

われました。要するに超重症で、その場で死んでもおかしいかと。で、怖くなってお願いしますということので入院することになりました。

病名は？

小杉… 解離性大動脈瘤（かいりせいだいどうみやくりゆう）といって血管がもろくなって、いつ破れてもおかしくない。そして十二月二十日に入院して、二十二日に緊急オペが行われました。朝9時から夕方4時までかかって人工心臓を使った大手術だったそうです。その手術は成功だったんですが、助かったのは気導術のおかげだと思ってるんです。手術中、夢うつつの中で「ラポール宇宙エネルギー、ラポール太陽…感謝します」と言い続けたんです。心の中で寝てる間中。もう藁をもすがる思いですよ。



（左写真…その手術痕）ここを開いて人工心臓でやっただけです。執刀医が言うには「あなたは重症だから一度に切ると命の保証はできない。」と。下半分はもう一年後にはまた悪くなってるから改めて再手術しましょうという

ことになりました。今回、執刀医曰く、最先端医療のあらゆる技術を使いました。で、一命をとりとめた訳ですが、その執刀してくださった方は、看護師さんが言うには「小杉さん、いい先生に当たったね」と。その先生は済生会病院ではゴッドハンドと言われる凄腕の先生なんだそうです。だから、傷口が綺麗なんです。私の患者さんの看護婦さんにチラッと見せると「凄腕の先生ですね。切り口見るとプロはわかる」とみんな驚きます。

本部長… 鎖骨から鳩尾まで切ったんです。上手ですね。切った痕が凄く綺麗ですよ。下手な場合は、ワイヤーが飛び出たりしてると。

その名医に当たった訳ですね。

小杉… 当たったの。運が強かった。さらにその先生曰く「私はあなたを治す自信はあります。でも、あなたの身体が耐えられなかったら即死にます」と言われました。心臓系と大動脈系はよく手術が始まる前に死ぬそうです。そして手術は成功のうちに終わりました。そして2022年の一月二十九日に退院しました。



そして術後はいかがだったんですか。

小杉… だいたいこういうのつて一年はダメなんだそうです。でも私はなんか力が付いてきちゃって二月二十日頃から仕事をしようと思っただけで、執刀医に相談したら「早すぎるよ。せめて三月三日のお雛様になったらしなさい」と言われたので、三月三日から調整しながらやりました。

で、どうゆう状況になられた時に静岡にいらしたんですか。

小杉… もっと楽になりたい。力がない。立ち上がれない。歩くのもヨロヨロ。こうなったら最後の手段、静岡に行くしかないと思って、四月十三日と十四日、一泊二日で本部に行ってきました。